

5 善き灰色猫

一匹の猫がおりました 善き灰色猫で
ブレインの塔に住んでいました
この猫のことを聞いた方もあるでしょうが
もう二度とは聞けぬお話しです

背中にまだらの模様 5
眉の上にはすじ模様
全身まだらの灰色で
ツルコケモモをまぶしたよう

その瞳には何かが浮かんでおりました
人が決して言い表せぬもの 10
その瞳には何かが浮かんでおりました
人には決して持ち得ぬもの

時折 美しいご婦人が
塔に入ってゆきました
時折 野ウサギが 15
こっそり入ってゆきました

でもブレインの塔を誰が探してみても
いくら懸命に探してみても
そこでは善き灰色猫が
喉をならしてうたっているだけ 20

猫は立ち上がると
優雅に石造りの塀に飛び乗って
何でもないかのように
美しい後ろ足をぴんと伸ばすだけでした

国中の女たちが
あれこれ噂するのも仕方のないこと 25
国中のどんな猫も
灰色猫とじゃれようとしないので

灰色猫の顔を見ると
ひどくおびえ 30
匂いを嗅ぐとすどく鳴いて
命からがら逃げだす始末

かつてブレインの王には奥方がありました
麗しくやさしい善きお方
でも天の国へと旅立たれ 35
王は悲しみにくれました

王には七人の美しい娘がありました
類まれなる気品を備えておりました
こんなに美しい娘が生まれたことはありません
こんなに美しい笑顔の娘を見た親はありません 40

ある日 お付きの者がそばにいない時
王は苦しい思いを吐き出しました
「かわいい娘たち そなたたちはどうなるだろうか
母親が逝ってしまったのに

「誰がそなたたちの幼い心に 45
淑女らしい振舞いを教えるだろう
淑女らしい考え方 感じ方を
一体誰が教えるだろう

「乙女らしい心と慎みを
どうやってさずけようか 50
わしには到底出来ぬ その務め
母親を失ったそなたたちに」

その時 石造りの暖炉の上の
善き灰色猫が話しかけました
「お止しなさい 愛するご主人様 55
そんなに嘆くのはおよしなさい

「私が七人のお嬢様をお育てしましょう
立派な貴婦人にして差し上げます
淑女らしい考え方と 乙女らしい感じ方を
教えて差し上げましょう 60

「私がお嬢様方を美しく高貴にお育てしましょう

あらゆる誘惑から遠ざけて
今開かんとする薔薇の蕾のようなお姿と
無垢なお心の姫君にお育てしましょう」

王はたいそう驚きました 65
恐ろしくさえありました
でも 七人の娘たちは大そう喜んで
楽しそうに大はしゃぎ

エラ王女がまだらの灰色猫を 70
そっと膝に抱きあげました
「この猫は おしゃべりできるのね
きっと私をまねたのよ」

猫は喉を鳴らして歌い 75
なめらかな首を伸ばすと
まだら模様の頬を
エラの頬にすりよせました

老練な王は 80
懇懇にこう言いました
「今宵 城で宴を開くが
かしこい猫よ お前も来るがいい」

猫が王をじっと見つめると
王の心は凍てつきました
「今宵 お城で宴が開かれるのなら
私もきっと参りましょう」

支度が整い 85
テーブルには豪華な食事
聖歌隊を引き連れて
ブレインの主教もおいでになりました

主教は 大変ずる賢く 90
魔術にたけたお方でした
多くの女たちを 火あぶりや
つるし首にしてみました

主教はかの悪魔のしるしに気がつく
女たちをよろこんで

真っ赤にもえる鉄の棒にまたがらせ
その光景にほくそ笑みました 95

主教は祈りを唱えると
宴の始まりを待ちかねました
ところが善き灰色猫の姿は
どこにもありません 100

そこへ輝く絹を身にまとう
美しいご婦人がやってきました
美しく魅力のあるその姿
この世に二人とないでしょう

上品な慎み深い身のこなしで 105
上座に着きました
誰もがご婦人に好意を抱き
目は釘付けになりました

ご婦人の声は皆の耳に心地よく響きました 110
ただ一人 ブレインの王を除いては
というのも王が聞いたその声は
石造りの暖炉で聞いた猫のもの

王は扉と窓を堅く閉じ
皆を部屋に閉じ込めました
「さあ神の恩寵により」王は言いました 115
「裁きを始めるのだ

「私のかわいい娘たちの魂に
恵みも平安も訪れまい
この忌まわしい魔女を審議して
火あぶりの刑にかけるまで」 120

「この女のことならば」主教は言いました
「上品で美しいこの女が
何と答えてみせるのか
私一人で試してみましよう」

王は答えて言いました 125
「いや 断じて誰一人出てはならぬ
この忌まわしい魔女が

真っ赤な燃えがらになり果てるまで」

主教はひざまずいて祈りました
皆は床にひれ伏しました 130
主教は休まず低い声で祈りました
皆は深い眠りに落ちました

主教は罪と悪魔を払う祈りと
言い逃れをさせぬ祈りをささげました
一方 主教の信仰篤い手は 135
美しいご婦人を絶えずさわっておりました

王はしっかり見ていましたが何も言わず
主教はただただ熱心に
自らよく知る 140
かの悪魔のしるしをさぐりました

主教はご婦人のゆりのような手を握ると
熱く口をつけました
祈りを絶えず唱えながらも
ああ なんと愛おしそうに

主教は祈りをやめ目を見開きました 145
驚きに口があんぐりと開きました
ああ 美しいゆりの手が
猫の前足に変わっていたのです

前足には長いかぎづめが備わって
この世のものとは思えぬ美しい胸は 150
ふさふさと毛もあたたかな
猫の胸へと変わりました

猫は長椅子に座っておりました
目はらんらんと輝いておりました
その目は主教に据えられて 155
まるで獲物を狙う猟犬のようでした

主教は何が起こるか
不安そうに辺りを見まわしました
猫はかぎづめでしっかり地面を蹴ると
屋根をつたって逃げました 160

猫は止まることなく逃げました
その姿はまるで影のようでした
主教のでっぴりとした体に
屋根は音をたててくずれました

天井は本が閉じるように二つに割れて
野地板がどしんと落ちました 165
続いて大小さまざまな石のかけらが
雨あられと降りました

空には大きな満月が
夜を昼のように照らしました 170
さあ尊大な主教の旅立ちです
天の川を昇ってゆきました

主教は大きく荒々しく叫び
丘も空も裂けんばかり
こんなにも激しい叫び声を 175
天でも地でも聞いたことはないでしょう

主教がひどいありさまで
天を駆けてゆくのが見えました
主教は恐れ^{おの}慄いて
祈りと歌をささげました 180

広い空を駆けるうち
その声はか細くなっていきました
いまだにその声が聞こえるという者もあれば
もう全く聞こえないという者もいます

ダラの丘に一人の羊飼いがおりました 185
寝ずの番をするつもりか
おいしいハギスにありつこうと
夜明け前にこっそり一頭盗むつもりなのか

羊飼いは遠くの空に叫び声を聞きました
猫と主教が駆けてゆくのが見えました 190
猫は尻尾を振り回し
舵を取っているかのようでした

あわれ主教は囚われの身
猫はゴロゴロと喉を鳴らしてうたいながら
主教ネズミをからかって 195
天の広間を追い回します

灰色猫はきれいな歌を歌いました
夕闇がせまり
エリカの花の周りで
ライチョウが七度円を描いて踊りました 200

水たまりのそばではイタチが
キャベツ畑ではウサギがジグを踊り
カワウソが谷から出てきて
メヌエットを踊りました

ハリネズミはエニシダの咲く丘で 205
カントリーダンスを踊り
きれいな雄ヒツジはねぐらから抜け出して
雌ヒツジとワルツを踊りました

灰色猫の歌

ミャオ わたしの主教様
歌をうたってあげましょう 210
ミャオ わたしの主教様
ボウ リリ ル！
ミャオ わたしの主教様 ボウ リリ ル

その夜 ボーダー地方の農夫が
戸口に座っていたところ 215
月が欠けてゆくのを目にして驚き
家の中に駆け込みました

炭の上に藁をくべると
強く息を吹きかけました
ベルファストの暦をめくってみても 220
今宵はまだ月が欠ける日ではありません

哀れ農夫はすっかり肝をつぶし
気も狂わんばかり
溺れる者の天への呻きが

- 聞こえたように思えたのです 225
- その夜 偉大な博士が
エトナ山の上で
ご来光を拝もうと
待ち構えておりました
- 金に輝く光のすじが 230
海の上に落ちる時
燃える炎と煙が
地獄から湧き上がるのが見えました
- 東の空には太陽が
行く手を明るく照らし
西の空には大きな月が 235
死人のように蒼ざめます
- 月のそばには小さな星が一つきり
ほかの星は見えません
広い空にただ一つ 240
輝き消えゆく^{たま}宝石のよう
- 博士は悲しくなって
目を逸らしました
この世の偉大な人物の
滅ぶ兆しと解ったのです 245
- あふれる涙を抑えようと
博士は北を向きました
すると天と地の間に
世にも奇妙なものが見えました
- 目をみはる光景でした 250
翼のない鳥が
ものすごい速さで
二股のものを運ぶのです
- 近づくにつれ だんだん大きくなりました
博士の胸は早鐘を打ちました 255
月も星も太陽も
もう眼には入りません

足をぶらぶら空をゆく
浮かれ主教に目を奪われました

灰色猫は主教の耳をひっかけて 260
恐ろしく深い淵へと運びます
主教の恐怖と言ったら
人が耐えうるものではありません

主教は泣き声で訴えました 「猫よ 放すな
油断するなよ 放すなよ 265
地面にでも海にでも落とせばいいが
でもあの淵だけはご免被る」

でも猫は頑なで残忍です
いとも楽し気に答えました
「天国は祝福されたところ 270
聖職者がゆくのは天国と決まっているでしょう」

「ああ かわいい猫よ 放さないで
どうか 爪をひっこめないでくれ
今落とされようとするあの淵が
天国などであるものか」 275

猫は爪に主教の耳をひっかけて
恐ろしく深い淵の上
爪がゆっくりひっこむと
断末魔の叫びがあがります

主教は鉛のように 280
虚ろな闇へ落ちました
主教が視界から消えるその刹那
正服がパタパタはためきました

淵へと落ちる主教の叫びがこだまして
その声もやがては消え入りました 285
それは大きな蜜蜂の羽音が
陽だまりの中消えてゆくのに似ていました

皆が静かに眠るころ
主教は地獄に落ちました
偉大な善き主教がそこで見たものは 290

世にも不思議な光景でした

轟音をたて炎と煙が

荒々しく立ち上っておりました
真っ直ぐと天に向かうその様は
見るも神々しき光景でした

295

炎が煙をもくもくと

陽に向かって上げるとき
東は目も眩む金に染まり
西は仄暗く照らされました

一方博士はたいそう感動し

語る言葉も見つかりません
目に映るのは善き灰色猫ではなく
美しいご婦人だったのです

300

草の緑の衣をまとい

瞳は露の玉のよう
金糸のような髪の毛が
肩をつつんでおりました

305

膝の下の靴下止めは

虹の縁飾りに彩られ
金の髪を梳きながら
楽し気にうたいました

310

「私は妖精の女王

あなたを傷つけはいたしません
私は善き人の守り神
悪い人は ご用心

315

「かなたの塔に 七粒の真珠

その数をすぐにも減らしましょう
うるわ麗しのスコットランドに 七本の花
一本ずつ手折^{たお}りましょう

「木陰にとまる一番小さな鳥を

最後の一羽といたしましょう
ブレインの王様には七人の王女
間もなく一人残らず失うのです

320

「妖精の国を流れる
澄んだ河で王女たちを清めましょう 325
この上もなく美しい花のため
天に東屋あずまやを探しましょう

「天の丘に降る
露を花に落としましょう
天使たちの顔に浮かぶ美しさが 330
王女たちに備わるように

「私は王女たちの姿が
美しくなるよう努めましょう
この悪しき世の中で
心が清くなるよう努めましょう」 335

今なおブレインの王様は
森をひとりぼっちで歩きます
王の七人の娘たちは
一人もいなくなりました

死の床についたわけではありません 340
ただ忽然こっぜんと消えたのです
一人また一人と王は娘を失いました
陽が沈みまた昇るその間に

王は言葉なく
またなすすべもなく 345
ただわびしい世界をさまよいました
まるで夢の中を歩くように

七年と七日の長い年月が
ゆっくりと過ぎてゆきました
王は麗うるわしの緑の森を 350
ひとりぼっちで歩きました

王は天を仰ぎました
目には涙が宿りました
愛する亡妻つまと
失った娘たちのことを思います 355

それでも王は信心深く
信仰が揺らぐことはありませんでした
悪の手の届かぬところで
再び家族に会う日をひたすらに待ちました

ひざまず 跪いて祈るときには 360
いつでも草が涙で濡れました
王の心はすっかり弱り
言葉もすっかり失いました

ふと左の肩越しに振り返り 365
後ろに目をやると
七人の美しい娘たちが
草地を足取り軽くやってきました

こんなにきれいな瞳を見たことはありません 370
これからだってないでしょう
こんなに美しい姿を
この世で見るなどないでしょう

瞳に浮かぶ喜びの輝きは 375
まるで朝日のようでした
森で一番美しい花でさえ
その姿の前に色褪せるでしょう

娘たちはみな頭と胸に
花輪を飾っておりました
この世にはないような美しい花が
額で揺れておりました

でももう止しましょう 私の古く善き豎琴よ 380
もう うたうのは止しましょう
おやこ 父娘の再会をうたうなら
最後までうたうことなど出来ぬでしょう

うるわ 麗しのスコットランドに 385
涙に濡れぬ瞳も頬もないでしょう
ひばりは歌を忘れ
死んで空から落ちるでしょう

ひな菊も

ゆりも色を変えるでしょう
月が血の涙を雨と降らせ 390
朝露を赤く染めるから

私の話を聞いたなら
誰でもすぐにわかるはず
罪や恥を越えたところには
悲しみもまたないのだと 395

(鎌田明子訳)